

史料室だより No.31

東洋英和女学院史料室委員会
発行 1988年11月6日

— ピアノ科の歴史Ⅱ ピアノ科百周年を迎えて —

第二次大戦後のピアノ科

元ピアノ科主任 加藤 信子

ピアノ科は戦争がはげしさを増した昭和20年3月に余儀なく閉鎖になりました。その年の8月15日に終戦になり、新しい21年を迎えた1月下旬のある日、長野彌先生から「近いうちに学校へ顔を出すように」というお電話を頂き、約一年ぶりになつかしい学校を訪れることが出来る喜びに心は跳りました

○ピアノ科再開

長野先生は4月からピアノ科を再開するといううれしいニュースをきかせてくださいました。戦前、ピアノ科というと今日の短大のピアノレッスンも、課外ピアノ科も一つでしたが、長野先生はこの機会にこの二つを分離して、短大のピアノを鎌倉千楨先生に、小女学部課外ピアノを私に、各々分担して主任の責任をとるように定められた由をお聞かせくださいました。その後、準備のために学校に行きました時には、すでに希望者の募集もしてくださって応募した23人の生徒の願書と、3人の教師の名前（高橋美子・長谷部愛子の両先生と主任加藤信子）を頂きました。

ピアノ教室は戦前のまま無事に守られていました。ただ8台のピアノのうち2台は姉妹校静岡英和が戦火で焼失されたので、そちらに贈られたとか。このような時姉妹校のためにお役に立てられたことをうれしく伺いました。6台のピアノも一年近く以前のままであったので決して良い状態ではありませんでした。西陽を真正面に受けるピアノ室には厚地のカーテンと各室におかれていた扇風



創立65周年記念リサイタルショパン祭
中央 関原和子さん 右隣 加藤信子先生

機は全然なく、当時は何でも忍耐をした時ですが、夏の暑さと暖房など思いもよらなかった冬の深刻な寒さは今でも思い出す程ですが、それよりピアノ室からピアノの音がきこえるようになったことの方がはるかに大きなよろこびでした。

○長野先生の指導

当時、学院は新学制による教育の改革という大切な時と伺い、長野先生は勿論ご多忙であったことは申すまでもないことです。そのような時にも先生はピアノ科のため、またかけ出しの頼りない主任のため種々ご指導とご注意を下さいました。その時頂いたことは今でもはっきり頭の中に残っています。

そのⅠ ピアノ科内のこと

- ① 人事は長野先生が責任をお持ち下さること。
- ② ピアノ科内部に関する諸事は、全面的に

任せるから思い通りにやりなさい。

そのⅡ 学院の一部のピアノ科について

① 課外ではあるが、ピアノ科は決して孤立しないこと。

② 学院の一つの枝としてつとめること。

主任は礼拝には週一回はピアノの奉仕をしてほしい。

③ 学院の行事には出席のこと。また必要に応じて奉仕もすること。

その他であったが、何でも相談に来なさいと付け加えて下さいました。

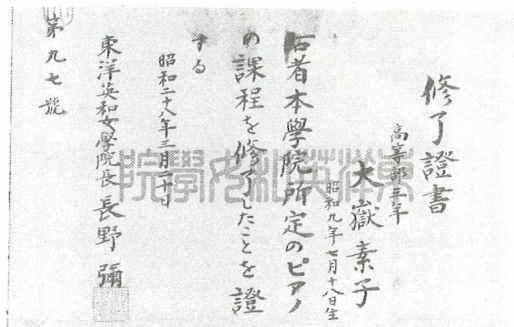
I ピアノ科として

○ピアノ科内の動き

年が改る毎に生徒の数は増し従って教師も多くなりました。物資の乏しい時でピアノの本業も粗末なものでした。希望者のなかにはピアノのない生徒もいます。当時は特別に練習用に貸したこともありました。

東洋英和のピアノ科には、グレードの制度がありそれはカナダトロントの公立音楽学校の制度によるものです。そのグレードの規則による教科書の原本となるものはカナダからとりよせられていたのですが、それは不可能となったので日本で容易に手に入る本を用い、原則を忠実に守って当時の教師会で練り考えた教科課程は「史料室だよりNo. 8」に掲載して頂いたものです。ただスケールの調子、バイエル・ツエルニー・バッハ等は毎年度曲を変えて(程度は同じもの)用います。その課程の取り決めにあたり、当時一番新しく出版になった原本を1~10まで揃えて取りよせて下さったのは、そのころ短大で御教えになっていた前校長ハミルトン先生です。私が東洋英和の教師に加えられた時の校長先生ですが、1922年ごろから数年、音楽部(今日のピアノ科)の主任でいらっしゃいました。ハミルトン先生は平常は内に厳と

したものをお持ちになり表面は静かでいらっしゃいますが、名校長と言われた先生でいつも後でしっかり支えていらして下さいという先生でした。ピアノ科のため何かとご後援をなさって下さいました。



グレード制というのは、ピアノ科に入科した生徒は各々の程度によってどこかのグレードに受持の先生が決められて属すのです。定められた課程を目指し勉強をして力をつけてテストを受けパスをすると、その年度3月終業式に学院長の御名前による修了証書を頂くことが出来るのです。このグレード制度は代々の院長先生の理解の下にあって今日でも継続されている東洋英和ピアノ科のもつ誇りであろうと思います。さてこの光栄ある最上級(6級)の課程を戦後最初に修了した生徒は大嶽素子さんです。この6級修了生にはそのころは4・50分の時間を要するプログラムを整えたリサイタルも課せられていました。昭和28年7月のことでした。生徒本人はもとより教師も大いに緊張をしたこの日でしたが、その上にまたとない幸いが増えられました。それはこのリサイタルにメルトン先生がいらして下さいだったので。メルトン先生という方は50年誌によせられた酒井広先生の記述によると、かつて東洋英和音楽科の全盛時代を築き上げられた大変能力のある先生でいらしたとのこと。たまたまこの時に御用で長崎に來られ、教え子の沢山居られる東京にお寄りになったと伺いました。

そしてこのリサイタルにもいらして下さったのです。メルトン先生はその当時もアメリカ・イリノイ州立大学音楽部のピアノ主任教授でいらっしゃるということです。大嶽さんのピアノも何曲かを聴いて下さいましたが、会場一ぱいの一同の願いによってショパンの曲をお弾き下さってこのリサイタルに大きな大きな花をそえて頂きました。(私事ながら私の姉達が御教えを頂いた先生ですから私が子供のころにお目にかかったことがあり、今ピアノの教師となった私をごらんになって大変に御喜び下さいました。)その後6級を修了した生徒は、福地信子(昭和34年)、三橋香代子(45年)、平尾由美子(47年)のみなさんです。

○リサイタル

ピアノ科にはまだ音楽部と言われていたころからリサイタルという名称のもとに放課後に1時間半か2時間ほどの時に何人か選ばれた生徒が、各々勉強した曲を発表して多くの方にきいて頂く機会を持っていました。ピアノ科が再開されてあまり時が経っていない時にも、もうリサイタルをしてはどうかとピアノ科内では相談をはじめた時、むしろ先にたって下さったのは長野先生でした。ある日の放課後に開かれたリサイタルは、当のピアノ科の不安等問題ではない程講堂一ぱいに先生方や生徒のみなさんがきいて下さいましたし、生徒達の演奏もなかなか上出来でした。感激したのはピアノ科一同でまた同時に感謝も一ぱいでした。そんなことが何年かつづきました。創立65周年を記念してショパン祭等を開催したことがありました。このリサイタルはショパンの曲でプログラムを作り、半分(前半)は生徒の演奏、後半は当時の関原和子さん(現永富和子)が演奏をして下さいました。井上双葉さんも芸大ご卒業直後にいらして頂き弾いて頂いたことがありました。リサイタルは立派なピアニストの演奏会とはちがひ、

同年輩の身近な友達の弾くピアノは親しみをもってきくことが出来て楽しかったと、今は学院の中堅の先生でいらっしゃる方からうれしい感想を伺いました。学院の時間の都合その他でだんだん形も変わりました。小学部にも以前は小学部のためのリサイタルをして頂き外崎先生はじめ先生方の理解ある計いの下にあったことをこれまた感謝をもって思い出されます。日本ではリサイタルという名称は通常は独奏会、独唱会を意味して用いられていますが、わが東洋英和にとっては固有名詞のような存在ですので、敢てそのまま用いていました。

○ピアノ科全生徒へのテスト

グレードの進級試験も、リサイタルの演奏も全員が毎年その機会を得ることは不可能なことです。何等かの方法で全生徒が年に一度は勉強のまとめをして発表することが出来る場を作りたいと考えた結果、全生徒に一年に2回(7月と3月)テストをすることにいたしました。生徒にとっても、教師にとってもこのテストはよい勉強となりました。準備するものは自由曲と課題とです。はじめのころそれ程生徒数の多くなかった時は、課題スケール、エチュード、バッハ、インベンション一曲とされていましたが、生徒が多くなってからは時間の都合上課題スケールと自由曲になりました。このテストは一応のマークはとりますが、それはむしろ覚えのためでその成績によって云々するものではありません。元来の目的は前に書きましたように一年なり、半年の間の勉強のまとめとその発表を大切にするとところにあると思うからです。

この全生徒の期末発表も戦後ピアノ科再開後からはじめられたものですが、その他にはじめられた勉強は次の二つのレッスンがあります。

○幼稚園のレッスン

生徒募集の応募願書のなかに幼稚園児の名前が見えるようになったのは、戦後間もないころから

でした。1人2人と人数もふえました。教室は5、6人の間はピアノ教室で充分でしたが、それ以上になって来た時、園児のために、もっと適当な教室をと考えるようになりました。ある時幼稚園（旧園舎時代）のホールでレッスンをしたところ子供達にもよろこばれ、幼稚園からも快諾を頂いて新園舎に移ってからは全面的に幼稚園二階の広いお室でレッスンを行うことになりました。広々した明るいお室と、テーブルも椅子もいつも使いたものであり、レッスンを待つ間も自由に出来てすべてのびのびとたのしいレッスンが出来ました。このころからピアノレッスンを希望する園児は年長、年少をあわせると25、6人くらいでした。年長、年少それぞれに4人か5人のグループをつくり、グループでレッスンをすることとピアノを弾く時は個人でなくてはなりませんので年長組の個人レッスンのため助手の先生をお願いするようになりました。助手をして下さったのは

15、6年間に豊原・山田・茂木の諸先生でした。幼い人たちがあきないでたのしく勉強出来るように、また切角のびようとする大切な芽をいためることなくそして個性を尊重しながら教師も一緒に学びつつピアノの世界に入れるように心掛けました。音符一つも知らなかったかわいい生徒たちも一年たつと誰もが小さい曲を弾けるようになります。この成長を幼稚園の先生方にまたお母様方にきいて頂きたいと3月には発表会をしました。（幼稚園では小さい生徒に分りやすく発表会という言葉を用いました）当日は院長先生、園長先生はじめ幼稚園の全部の先生が並んで下さるし、お母様もお顔を揃えて下さるなかで、かわいいほほを紅潮させて小さい手で弾くピアノをみなさんに聞いて頂くうれしい時です。先生方はきいて下さるだけでなく、ピアノを弾いて下さる先生、うたをうたわせて下さる先生、そしておほめのおことばを下さる院長先生、ほんとにたのしい午後でし

た。幼稚園はピアノの生徒は最高は30人を過ぎた時がありました。毎年1人、2人はグレードのテストを受け、卒園式の時ピアノの証書を頂いた園児もいました。

○音感の勉強クラス

この勉強（音感とリズム訓練）は年少の時ほど効果が大であるとされています。幼稚園の年長になるとこの勉強を始めましたところ、やはりよい結果が得られました。けれどもほとんどの生徒が幼稚園を卒業するとこの勉強がつかなくなるのでそれでは残念だからぜひ小学部にも継続して欲しいという要望が大きく、遂に院長と小学部長にご相談をして小学生にもこの勉強の希望者の募集をしました。集まった希望生徒を低学年と高学年の二組に分けピアノ室で勉強をはじめました。二年目には教室に入れなくなり、教室を得るためには毎年苦勞をしました。やっと小学部講堂のステージの上がこの勉強の教室になりました。その内容は、聴音（和音、単音）とリズムの訓練、ソルフェージュ、和音、旋律の書取り、楽典等の勉強です。グループレッスンのたのしさもあって、活気もありました。小学部は学年別にクラス作りしました。毎年学年は上り中学部にもクラスが延長され、中学部は外部からの入学した生徒の希望者も加わります。

やがて高等部も小人数ながら希望者があり、なかには卒業までがんばった生徒も何人か居ました。

人数だけでなく、勉強の効果もありました。

秋月部長になられてから、この勉強のために、小学部の視聴覚室を週一日をあけて下さるようになり、それ以後はさすがに落ち付いた、たのしいレッスンを続けることが出来てほんとに感謝でございました。こうしてピアノ科は幼稚園から高等部まで一貫した勉強として継続出来ることは、大変にうれしいことです。けれども聴音のクラスのように教室をもたなかった勉強は、理解し協力し

て下さった先生方、特に小学部の部長、教頭はじめ先生方に感謝をいたしております。

○院長先生の交代とピアノ科

学院は毎年新一年を迎える前に、保護者のために説明会があり、各教科の先生方からお話があります。ピアノ科もその中で説明をして頂いて来ましたが、井上教頭先生の御退任後は、主任がするようにとの命によってその時以後毎年この会に出ることになり、ピアノ科の簡単な歴史と内容を説明いたしてまいりました。

ピアノ科の再開からあらゆる面でご指導を頂いた長野先生が、昭和47年3月に御退任になりました。顧みて昭和21年の再開時には23人の生徒と3人の教師しか居なかったピアノ科はそれから26年の年を経て生徒数284名、教師15名になり日々励みの中に在ることを、長野院長に感謝の一つとさせて頂けたらと思ったことでした。同年の4月から石井次郎先生を新院長としてお迎えいたしましてから、先生はピアノ科は従前通りにとの言葉を頂いておりました。たまたま前記の説明会の折、会后、講堂の外にお立ちになっていた石井先生にお目にかかりました。「加藤さん、よいお話をありがとう。ピアノ科のこともよく分る話でした。そして東洋英和にとっても大切な勉強であると思ったから今後もしっかりやってください」とあの温顔を以ってその言葉をかけて頂いたことは忘れられません。その後も、本当の教育とはと思うようなことを折にふれて伺う時、ピアノ科のためまた私にとってもどんなに大きな励ましと指針を頂けたかわかりませんでした。

○学院の記念音楽会への参加

東洋英和創立を記念して学院全体で何回か音楽会が開催されました。

70周年記念の際は、明治神宮外苑日本青年館ホール、幼稚園のかわいい連弾、小学生、中学生等が弾きました。

80周年の時は厚生年金ホール。中学部、高等部生が二台のピアノによる二重奏の二組が参加。

次に87周年の折には、渋谷公会堂ホールが会場となり、小学部から二台のピアノによる八手連弾 スメタナ作曲ロンド を4人の生徒で弾き、中学部は「二台のピアノによる二重奏 モーツァルト作曲 ピアノソナタニ長調 一楽章」、高等部はピアノ独奏「ブラームス作曲 ラプソディーロ短調」をそれぞれ演奏いたしました。ピアノ科だけの会とは異り、またよい刺激でありました。学院全体という大きいよろこびでもありました。

○ピアノ交歓会

音楽部ではキリスト教主義による女子校と協賛合同して合唱交歓会をなさったり、富岡正男先生立教女学院の木岡梅子先生等を中心に「コワイヤブック」も4、5冊出版されました。その参加校のうち何校かはピアノ科もありましたので、器楽も交歓会をして互に励み合えたらと考え、富岡・木岡先生方の大きな後援でピアノ交歓も開催するはこびとなり、遂に昭和59年6月13日(土)

第一回は東洋英和を会場に開催となりました。

第二回は立教女学院

第三回は女子学院

第四回は再び東洋英和でいたしました。

参加校は、立教女学院・女子学院・恵泉女学園と東洋英和でした。プログラムは、ピアノ演奏前に礼拝をし、第一回の際は長野院長におすすめとごあいさつをして頂きました。それにならい各校の院長先生が、御すすめとごあいさつに御顔をお見せ下さいました。会を重ねるうち各校の教師が何度か集り、相談を重ねて共同でピアノの本を編集し「ピアノのために」という本題を以って、キリスト教音楽学会器楽グループの名で、音楽の友社から昭和34年12月に発行いたしました。

Ⅱ 学院の一枝として

長野先生のおすすめによって、戦後間もないころ朝の礼拝の奏樂の御用をいたしました。この御奉仕はそんなに長い間ではありませんでしたが、礼拝を担当なさった先生方のお顔を思い出します。

今度この稿を書くため手許にある古いプログラムの数々をみましたところ、オルガンとかピアノを以ってかなりの場合に御用をしており、「この時も、こんな大きな式典でも」と、またある時は小学部、幼稚園、短大にも弾かせて頂いていた自分の名を見て驚く程です。10月1日追悼礼拝の奏樂はかなり長くつづいておりました。

○校外行事に参加したこと。

追分で行われている中1オリエンテーションはほんとに長い年一緒に参り、朝夕の礼拝とか聖書の時間にはオルガンの前に坐り、時には夕陽会での御用をしたり、キャンプソングをたのしくうたってもらったりしました。

野尻中2の夏期学校も毎年同行をして、やはり、奏樂が第一のつとめでした。朝夕の礼拝には小さいオルガンが野外にはこぼれ、みんなの歌う讚美歌の聲が木々の緑に、また静かな湖に吸い込まれてゆくような礼拝は今も心に残ります。湖畔に燃える火をかこんでうたったこともたのしい思い出です。その他に高3の天城での修養会は、行く度にまたちがった緊張をもってオルガンを弾き、夕陽会で話しをしたこと等を思うと、このような機会を通して、平常は余り一緒に出来ない立場にあるピアノ教師も一つの学院の中にあることを確認させられ、いつもかつて長野先生の仰有ったピアノ科は孤立しないようにとのお言葉も、石井先生のお喜びのお言葉もここにあるとよく考えたことでした。

○院長先生の交代とピアノ科のこと。

さて石井院長から光明院長に代られてからの三年間は余り変ることもなかったのですが、私は学

院の専任という資格でしたのでその立場を退き、同時に主任を交代することになりました。思えば昭和21年4月から53年度終りまでの長い歳月を戦後の困難な時を経てその日まで、導かれ、守られ、許されたことに対し、ただ「感謝」の一言あるのみでございました。

早速、院長先生、事務長から後任の推薦（複数でという）のご依頼、またピアノ科の内容とか、主任の職責等を細かく質問を受けたり、お話をしたり、更に書類にまとめて提出するようにお頼まれました。今後はピアノ科には専任をおかないこと、主任も講師の一人で主任を嘱託する、嘱託講師とすること等を取り決められその旨をピアノ科全教師に伝達して頂くことになりました。その後、ピアノ科全教師が集まり光明院長からお話がありました。

1. 今年度から（54年度）主任は交代し大宮暁美先生が主任となること。
2. ピアノ科教師は全員時間講師であること。
3. ピアノ科教師はピアノ授業のみを担当すること。
4. 現在はピアノ科には定年制がないが、いずれ決定されること。

以上でした。その時までは上記の通り定年制がなかったので、追って決定まではすべて教師は現状のままということで私も全く同じ時間数のまま幼稚園から高校までのピアノレッスン。聴音のクラス等をもって在職しました。私の頭の中には後任を考え、聴音クラスと幼稚園レッスンの一部を分担して頂いたりしました。それから3年目の夏近くピアノ科教師にも定年制が決定した旨光明院長からお話があり、56年度を以って、加藤、吉沢、塚本の三教師がピアノ科の最初の定年退職をいたしました。翌57年度には麻生ひさえ教師が定年退職をされました。

東洋英和音楽部の歴史は永く100年を越えるものです。その間は音楽科と言われ、音楽部と改称され、1932年ごろハミルトン先生が校長にご就任になった後内容も変り、希望者にピアノを教授するピアノ科となって今日に至ったのです。その間何十年前も前から多少の内容の添削はあっても今日なおわがピアノ科には定められたグレードがおかれていることは、今日それが大きな力でありまた誇りでもあると思います。ピアノを学ぶ上で技術の向上を願うことは当然のことであり、そうでなくてはならないと思いますがピアノ科は東洋英和の一枝であることを忘れてはならないと思います。東洋英和の根底にある大切なこと、その光に照らされ導かれたピアノ科であることをどんな時にも祈りたいと思います。

○おわりに

昨年3月に昇天になった石井次郎先生はご在任は長くはなかったのですが、ピアノ科をもほんとはよくご理解下さった先生です。お口数は決して多くはなかったのですが、いつもあの温顔をもって適切な御指導とご助言を下さいましたことは決

して忘れられません。

昨年5月に行われた石井先生の追悼会で、吾妻國年先生の追悼説教を伺い、石井先生の思想、そのお言葉をほんとによくお伝え頂いたと思いました。更に「敬和会」報で文字として後々まで残して頂きました。そのなかでのピアノ科に関する記事をしるさせて頂きたいと思います。

「石井先生が東洋英和の音楽教育、ピアノ科教育についてきわめて厳格なお考えをお持ちだったことを忘れることが出来ません。それにふれた時私は肅然として襟を正す思いにかられます(中略)

東洋英和の音楽教育、またピアノ科教育もたんなるテクニックだけならそれを教える人はいくらもいます。(中略)英和の幼い子供達や若い生徒達をそのような人の手にゆだねることはできないのです。しかし英和の音楽教育は技術の問題ではなく音楽を通しての人格教育宗教教育を目的としているのです」と。

いつも心の中にとどめおきたいお言葉とします。

53年度ピアノ科生

	高	中	小	幼	聴音	合計	52年度	出席
加藤 信子	1	6	19	15	78	41	(45)	4日
麻生ひさゑ	4	6	8			18	(18)	2
大宮 暁美	3	8	7			18	(20)	2
加藤 恵	3	5	8	6		22	(21)	2
亀島 久子	2	6	7			15	(17)	2
川口 寿子	4	3	9			16	(16)	2
塩見 滋子		9	7			16	(19)	2
塚本 房子	2	9	4			15	(16)	2
藤岡 悠紀	2	4	10			16	(17)	2
丸山もと子	2	9	6			17	(16)	2
水野 玲子		10	7			17	(17)	2
鶴岡香代子	1	8	7			16	(17)	2
最上 絢子	2	7	7			16	(17)	2
森久保夏実	2	6	8			16	(19)	2
吉沢 雪	4	5	8			17	(17)	2
53年度合計	32	101	122	21	78	276	(292)	
52年度	36	103	132	21	75	292		
51 "	36	117	130	26	81	309		
50 "	40	104	117	26	68	287		
49 "	41	115	115	26	68	297		
48 "	38	119	120	31	83	308		
47 "	26	116	116	26	70	284		

ピアノ科の現状 (1987年度)

実習生徒数 150名(51)(幼…10
小…56(37) 中…61(11)
高…23(3))内はソルフェージュ
講師 12名
ピアノレッスン 授業のある期間週1
回、放課後又は昼休み、約30分間
ソルフェージュクラス 同上(ただしグ
ループレッスン)
幼稚園児 同上(ただしピアノとソル
フェージュを併せて1回の授業とする。
両方で約1時間)
グレードテスト 初級から6段階あり、
7月と12月に進級試験を行う。
テスト 2月に全生徒が受ける。その
結果は年度末に「ピアノ通信」と
いう担当教師からの総評と共に、
保護者に郵送される。
ピアノコンサート 1年に1回、学習成果
の発表の場をもつ。
費用 登録料(入科時)5,000円
実習料 ピアノ90,000円 }年額
ソルフェージュ24,000円 }
前期・後期に分納
幼稚園児はソルフェージュの実習料は不用

1981年～1987年のピアノ科

— 創立 100 周年記念音楽会をはさんで —

ピアノ科 丸山もと子

本題に入る前に、自己紹介も兼ねて、『ピアノ科と私』について書かせて載く。

私がピアノ科に入ったのは、小学部に入学した1955年である。以来生徒として10年間学び、武蔵野音楽大学（ピアノ科）を卒業と同時に講師と成り現在に至っている。人にこう話せば、私がピアノ科に深い愛着を感じるのには当然、と思われるだろう。果してそれは、何に対しての愛着なのだろう、と自問してみた。

ピアノ科が創立されたのは、学院創立2年後の1886年である。日本ではピアノ教育どころか西洋音楽教育はほとんど成されていない時代に、3人の宣教師によって『神を賛美し、神に感謝を捧げる為に、音楽を奉仕させる目的をもって』開設されたのだ。英和の中で育ち、その間に信仰を与えられて、音楽の道に進んだ私は、ほんとうに恵まれていたのだ、と言わざるを得ない。

ピアノ科を設立された、ミス・スーゼ、ミス・モード、ミス・ウィンタミュートの3人の先生方が「種をまく人」とするならば、何と多くの英和の生徒達、先生達が、音楽を知りピアノを知って、人生を豊かに高めるといふ「実」を与えられたことだろう。

現代に至って、ピアノ教育は日本中至る所で受けられる様になり、教えられる曲なども変化してきている。生徒達は、ピアノに限らず、様々な楽器に触れ、大方の望むものを習うことができる。しかしその「源」は、たくさんはないはず……である。私はその「源」に少しでも近づきたいと願っている。願いつつ、その様な生き方へと導いてくれたピアノ科に対し、少しでも恩返しが出来れば、とも考えている。これが、私のピアノ科に対

する愛着なのではなからうか？

今日まで、音楽を志したおかげで、ピアノ科内においてもたくさんの先生方にお世話になったが、特に、恩師・加藤信子先生、1979年度から主任をなさっている大宮暁美先生は、生涯忘れ得ぬ先生となるはずである。

前置きが長くなったが、加藤先生が御退職になった1982年度から、長年続けておられた「聴音」の授業を、木村裕子先生と共に引き継がせて戴いたことについて、少しだけ書くことを許してほしい。加藤先生はピアノのレッスンに加えて、音感・リズム感を養う為、聴音に心をくだいておられた。ピアノが一通りすむと、和音や単音・リズム等を生徒に聴き取らせ、やがてそれを書き取ったり、記憶したりする様に、私自身も教えられた覚えがある。先生がお辞めになる1年前から、私は中学生の聴音をお手伝いするようになった。リズム・メロディー・ハーモニーの書き取りが主な内容であった。木村先生と私は、その頃外部のソルフェージュ講習会を受けに行ったりもしてから、「聴音」を引きついだのである。しかしながら、名称を「ソルフェージュ」に変えたのには、広く音楽の基礎一般を訓練する、という意味では、「ソルフェージュ」が、最も通常的に使われている音楽用語だと思われたためである。現在、ソルフェージュは、学年毎のクラス編成で、系統だったテキストを持ち、リズム・メロディー・ハーモニーの基礎を多方面から教えている。

1981年度から始まった『ピアノ・コンサート』について、次に書きたいと思う。

ピアノ科のリサイタルには、長い歴史がある、

という事は、史料室だより№8他により語られているが、私が覚えているのは、1年に1回、中学部のH・Rの時間に、大講堂に全員の中学生を集めて開かれていた『ピアノ・リサイタル』である。出演者は、グレードテストを受けてパスした中学部生徒を中心に選ばれていた。その為、自分のクラスの友達が弾く番になると、とたんに強く拍手して応援するなど、ほほえましい場面も多くあったが、1981年度からは、授業時間内でのリサイタルは開かれなくなり、代わって初められたのがこの『ピアノ・コンサート』である。

ピアノ・コンサートになってから変わったことの第1は、小学部から高等部まで、(1987年度以降は幼稚園のピアノ科生も参加する様になる)すべての生徒が出演できるようになったこと、その上、日頃はお会いすることの少ない御家族の方や、友達など、広範囲の方々に聴いていただくことができる場が、与えられたことであろう。

幅広い学年層を一堂に集めてのピアノ・コンサートも、また楽しいものである。とは言え、出演人数も、時間の都合上限られており、毎年、グレードテストを受けて進級した人を主に、教師全員の意見を出し合って、平均25～6名の出演者を決めている。プログラム作成に当っては、どの学年からも1人は参加している様に配慮するが、当然、難易とりまぜた曲が並ぶことになる。それらの曲を、創られた年代・様式・形式や、曲の性格等も、全体としてちぐはぐな感じを与えずに、自然に聴こえて楽しめるような順序に並べる作業は、毎年頭を悩ませる所なのである。また、長期間在籍している生徒には必ず順番は回ってくるが、約150名もの生徒達を、グレードテストを受ける受けないにかかわらず、上達させた上で、さらに公平に出演する機会を与えてゆくように、配慮がなされている。

『創立100周年記念音楽会』について、その内容は史料室だより№25の中に既に記されている。

晴れの大舞台でピアニストたちの緊張は大変だったに違いない。しかしそれにも増して、大きな感激を誰もがあじわったことと思う。

続いて1986年度の「ピアノ・コンサート」は、一人の先生からの発案で、「100周年記念」と銘打って行なわれた。以下、プログラムに載せられた一文より。『東洋英和の創業期1886年に、ピアノ科の前身である音楽科は始まりました。学院創立後、わずか2年の後、西洋音楽を教えようと専修科という形で音楽科を設立して下さったことに感謝と感動の気持ちでいっぱいです。本日のコンサートは、百年の歴史をつちかかってきたピアノ科の記念の会として開くことにいたしました。』

このコンサートでは、皆で知恵をしぼって考えた結果、以前ピアノ科で教えておられた、作曲家・田中友子先生に委託して、山田耕作・作曲の校歌による変奏曲『東洋英和』なるピアノ独奏曲を作曲して載せ、中3の生徒が初演した。さらにピアノ科創立の時代に、欧米の音楽界はどの様な状況であったのか思いをいたし、当時の曲の中からいくつかを選んでプログラムの後半に組み入れた。このコンサートは、一つの区切りであると同時に、次の一步を進めるためのスタートにもしたい、という思いが込められていた様に思う。それにしても100年目にピアノ科の為のピアノ曲が創られたとは、もしもミス・スーゼ、ミス・モード、ミス・ウィンタミュートの先生方がお聞きになったらどんな風におっしゃることだろう。今後のピアノ科の発展を願いつつ、古今東西の曲と共に、この曲も弾き続けてゆきたいものだと思う。

史料室だより 目次 №21～30

- №21 発行 1984・3・1
 私のなかの東洋英和 谷川 貞夫
- №22 発行 1984・7・10
 東洋英和女学校幼稚園師範科の頃
 I 白井 愛 昭和3年師範科卒業
 II 中野 済子 昭和13年師範科卒業
 III 白戸 道子 昭和19年師範科卒業
 東洋英和女学校幼稚園師範科入学志願者心得
 (昭和8年度)
 東洋英和女学校幼稚園師範科科学則(昭和9年度)
 東洋英和女学院保育専攻部学則
- №23 発行 1984・11・6
 〈創立100周年記念号〉
 幼稚園に於けるキリスト教教育 荒牧富士子
 戦後、小学部に於けるキリスト教教育はどのよ
 うにおこなわれたか 伊藤 博正
 戦後の宗教教育を担当して 奥 興
 あなたのパンを水の上に投げよ 水野 誠
 短大のキリスト教教育 十時 英二
 創立100周年記念行事予定
- №24 発行 1985・3・11
 百年の歩みの中で 一記念行事写真一
 母校の百周年を終えて 上田 朝
 行事あれこれ 中野登美子
 川島先生のお手紙から
- №25 発行 1985・11・6
 東洋英和女学院創立100周年記念礼拝
 式辞 光明 照子
 創立100周年記念講演会
 「教育はどこへ」 永井 道雄
 100周年記念出版・記念特集号目録
 創立100周年記念音楽会 プログラム他
 創立100周年記念行事・事業記録目録
 創立100周年記念行事写真
- №26 発行 1985・3・10
 生徒に伝える東洋英和の歴史 浜野 浩一
- №27 発行 1986・11・6
 追分寮の27年
 「追分寮について」外崎長三郎元小学部長に聞
 く 1985・5・11 史料室委員会
 昭和40年代の追分寮 野田文一郎
 追分寮こぼれ話 栗原 正巳
 昭和61年度軽井沢追分寮使用状況
 新史料室オープン
- №28 発行 1987・3・13
 小羊の泉 樫村 辨市
 小学科の頃 池田 明子
- №29 発行 1987・11・6
 ひろがる輪・麻の花会・敬和会
 麻の花会誌記録より
 麻の花会の思い出 井上 茂登
 東光会聖書研究会 (朽木記)
 「敬和会」一礼拝の恵みへの招き 木山 房子
 史料室の仕事より 宇佐見邦輔
 史料室日誌から
- №30 発行 1988・3・1
 新築移転当時を回想して 一小学部新校舎35
 年前のおぼえ書一 外崎長三郎
 新校舎での1年間 甲野 恵美
 小学部校舎移転のころ 今村 史子
 小学部現校舎から巣立った卒業生の人数
 史料室日誌から
- あとがき №8に続いて100周年を迎えたピアノ
 科を特集しました。加藤先生は、幼稚園の発表会
 のプログラムや、「ピアノのために」等のさまざま
 な資料をお持ち下さいましたが、紙面の都合で
 掲載出来ず残念です。宗教音楽についてもいずれ
 纏める予定です。(中・高部 斎藤 簡井 朽木)